２０２３年度 国際ユース作文コンテスト

最終選考結果および上位入賞作品

テーマ：「若者がつくる平和な未来」

公益財団法人 五井平和財団

www.goipeace.or.jp

2023.10.31

２０２３年度「国際ユース作文コンテスト」開催にあたって

この度、２０２３年度「国際ユース作文コンテスト」が盛大に開催されましたことを、心よりお祝い申し上げます。

関係者の皆様におかれましては、日頃から多様で活発な活動を展開され、世界の平和と持続可能な社会・地域づくりに多大なる御尽力を頂いていることに、深く敬意を表しますとともに、心から感謝申し上げます。

今回のコンテストでは、「若者がつくる平和な未来」というテーマのもと、世界１６８か国の子供や若者たちから、約２万点にのぼる作品の応募が寄せられたと伺っております。

その中で今回、文部科学大臣賞を受賞されましたお二人をはじめ、各賞を受賞された皆様、誠におめでとうございます。

先行きが不透明で予測困難なこれからの時代を生きる若者たちにとって、多様な考え方に触れ、相互の理解と尊重を深めながら、自身の価値観を磨いていくことはとても大切なことだと思います。

「国際ユース作文コンテスト」では、毎回すばらしい作品が数多く寄せられていると伺っております。このような取組を通じて、次代を担う世界中の若者が交流し、世界の平和と持続可能な社会・地域づくりにつながることを祈念しております。

令和５年１０月３１日

文部科学事務次官　　藤原　章夫

2023 年度 国際ユース作文コンテスト受賞者

テ ー マ：「若者がつくる平和な未来」
参加国数：168 カ国
応募総数：合計 20,674 作品（子どもの部 6,922 作品、若者の部 13,752 作品）

※学校名、年齢等の受賞者情報は、募集締切日（2023 年 6 月 15 日）時点のもの

文部科学大臣賞（最優秀賞）（各 1 点）

＜子どもの部＞

- 「きょうふのない世界」
  チママンダ・ケイトリン・ウゾエチ（ナイジェリア）8 歳

＜若者の部＞

- 「夢見る力」
  島﨑　みちほ（東京都）17 歳

優秀賞（各 3 点）

＜子どもの部＞

- 「相手の立場に立って考えること」
  黒岩　歩未（東京都）13 歳
- 「私たちはカラーパレット」
  アネリス・クリステル・ワルワチ・キスペ（ペルー）14 歳
- 「隣人を愛すことを受け継ぐ：若者こそが世界をより良い場所に変えられる」
  マリーナ・ラウラ・ソアレス・アセベド（ブラジル）14 歳

＜若者の部＞

- 「平和な世界がここに」
  フェイソラ・マリア・ボラリンワ（ナイジェリア）17 歳
- 「平和についての 700 語」
  ヤン・コロレフ（ベラルーシ＜ポーランド在住＞）17 歳
- 「平和な明日のために違いを受け入れること」
  ハシーブ・イクバル（パキスタン）22 歳

入選（各 5 点）

＜子どもの部＞

- 「ぼくはまだ 7 さい」
  シドール・ヤロスラフ（ウクライナ）7 歳
- 「平和な世の中にするために」
  染谷　春花（茨城県）13 歳
- 「正義とはなにか」
  寒河井　創将（東京都）14 歳
- 「平和を信じる：シンプルな行動」
  タニシカ・アグラーベ（米国）14 歳
- 「意識改革で平和な世界へ」
  弓削　勇人（東京都）15 歳

＜若者の部＞

- 「壁を打ち破ることの大切さ：レッテルに捉われてはいけないのはなぜか」
  早川　瑞希（東京都）15 歳
- 「愛を通して制度を組み替える：平和に向けて若者が進む道のり」
  ゲーナ・クッバ（米国）16 歳
- 「誕生日ケーキのろうそく」
  ミラ（ベラルーシ）18 歳
- 「領主の宗教は領民の宗教？――血塗られた橋から明るい未来へ：より良い明日に向けての若者の結束」
  アイシャ・ムヒッチ（ボスニア・ヘルツェゴビナ）20 歳
- 「思いやりの中に平和を見つける」
  フォラサデ・ボラリンワ（ナイジェリア）21 歳

佳作（各 25 点）

＜子どもの部＞

- ナキヤ・アフラ（ブルネイ）6 歳
- 野上　哩誉（日本＜米国在住＞）10 歳
- チーハン・チェン（中国）11 歳
- シンゾーガン・ボリス・プルーデント・M・U（ベナン）11 歳
- クルーエ・エスティルベル・G・ラブラドール（フィリピン）12 歳
- クリスタル・キム（韓国）12 歳
- 佐藤　心葉（長野県）12 歳
- 波戸　凛佳（兵庫県）12 歳
- 佐々木　太希（兵庫県）12 歳
- 神谷　知玖（長野県）12 歳
- ハナ・ゴロップ（日本＆英国＜中国在住＞）13 歳
- 山田　陽沙（京都府）13 歳
- ケイリー・クレア・ゴー・ソー（フィリピン）13 歳
- 村下　乃愛（東京都）13 歳
- 須江　優輝（東京都）13 歳
- クロエ・キム（米国）14 歳
- クレア・タン（米国）14 歳
- ダイアナ・オシャン（カザフスタン）14 歳
- 林　恩綺（マレーシア＆台湾＜神奈川県在住＞）14 歳
- ジェシカ・ジュブレール（ヨルダン）14 歳
- 大塔　香凛（栃木県）14 歳
- 黒田　真央（東京都）14 歳
- プラシャンサ・シュレスタ（ネパール）14 歳
- タン・レー・エン（マレーシア）14 歳
- タウアン・サシェ・デ・フィゲイレド（ブラジル）14 歳

＜若者の部＞

- チット・コーン・チョー・ター（ミャンマー）15 歳
- ヒョンジン・ビッキー・リー（韓国）15 歳
- ルジャイン・スワイス（ヨルダン）15 歳
- ミヤット・ティリ・ゾー（ミャンマー）15 歳
- 乾　穂乃花（東京都）16 歳
- ニル・ムズラクル（トルコ）16 歳
- 柳沢　凜（愛知県）16 歳
- 田中　よつ葉（愛知県）16 歳
- ザキ・ハフィズ・ゼン（インドネシア）16 歳
- セシリア・トリソリーニ・バリエントス（ペルー）17 歳
- マイケル・レビー・M・アリリオ（フィリピン）17 歳
- 青木　幸子（東京都）17 歳
- 本田　咲（東京都）17 歳
- 西田　志織（東京都）17 歳
- タチアナ・マルケビッチ（ベラルーシ）17 歳
- アンジェリカ・ウェイネス・ベルナルド（フィリピン）18 歳
- ラミース・アンザ・カーン（パキスタン）18 歳
- アナスタシーア・ラドゥトナ（ウクライナ）20 歳
- メトソンマレム・M・チャン（インド）20 歳
- ロパムドラ・ゴシュ（インド）21 歳
- ノイ・ベン=セード（イスラエル）21 歳
- フッダ・アムジャド（パキスタン）22 歳
- ルイス・グスタボ・ゴンサルベス・バレイラ（ブラジル）22 歳
- ラフィア・アフマド（パキスタン）23 歳
- セサム・ラナ・マガール（ネパール）23 歳

学校特別賞（3 校）

- 晃華学園中学校高等学校（東京都）
- 東京学芸大学附属世田谷中学校（東京都）
- 東京都立大泉高等学校附属中学校（東京都）

学校奨励賞（74 校）

- 愛知県立千種高等学校（愛知県）
- アル・イズハル・ポンドク・ラブ・イスラーム中学校（インドネシア南ジャカルタ市）
- アルマディナ・スクール・ポロ校（モロッコ・カサブランカ市）
- アンティーク専門学校ジャーナリズム特別プログラム（フィリピン・アンティーク州）
- チューリッヒ日本人学校日本語補習校（スイス）
- 筑波大学附属坂戸高等学校（埼玉県）
- テサロニキ市立アルサケイオー中等教育学校（ギリシャ）
- デスティニー・インターナショナルカレッジ（ナイジェリア・オスン州）
- TED メルシン・カレッジ（トルコ）

- 板橋区立緑小学校（東京都）
- FPT 大学（ベトナム・ハノイ市）
- 大阪教育大学附属池田中学校（大阪府）
- 大田区立大森第六中学校（東京都）
- OOU ラゾ・トリポフスキー（北マケドニア・スコピエ市）
- オゼル・カグダス・ビリム・カレッジ（トルコ・ムーラ県）
- 鹿児島市立鹿児島玉龍中学校・高等学校（鹿児島県）
- ギムナジウム・シュロバロバ（スロバキア・コシツェ市）
- ギヤサディン・インターナショナルスクール（モルディブ・マレ市）
- 京都先端科学大学附属中学校高等学校（京都府）
- 居林覚民中学（マレーシア・ケダ州）
- グアダラハラ大学附属第 8 高等学校（メキシコ）
- クラーク記念国際高等学校（愛知）
- 啓明学園初等学校（東京都）
- 公民国民型華文小学（マレーシア・ペナン州）
- こくご塾 KURU（東京都）
- コレジオ・ビタル・ブラジル（ブラジル・サンパウロ州）
- コロトラン地域高等学校（メキシコ・ハリスコ州）
- サトリウィタヤ学校（タイ・バンコク都）
- サンタマリア中学校（ブラジル・サンパウロ州）
- サント・トマス小学校分校（フィリピン・ラグナ州）
- シカゴ双葉会日本語学校補習校（米国イリノイ州）
- シドニー日本語土曜学校
  （オーストラリア・ニューサウスウェールズ州）
- ジャマルディン・スクール（モルディブ・マレ市）
- 常総学院中学校・高等学校（茨城県）
- 城南学園中学校・高等学校（大阪府）
- 昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校（東京都）
- 新宿区立新宿西戸山中学校（東京都）
- スー先生インターナショナルスクール（ミャンマー・ヤンゴン市）
- 須磨学園中学校（兵庫県）
- スリ・ニパー国民中等学校（マレーシア・クランタン州）
- 聖ヨゼフ修道院学校クエッタ校（パキスタン）
- セシ高等学校（ブラジル・リオグランデ・ド・ノルテ州）
- 第 11 学校（ウクライナ・チェルカッシー州）
- タマン・ペランギ・インダ中学校（マレーシア・ジョホール州）
- デラサール・リパ社（フィリピン）
- 東京ベイインターナショナルスクール（東京都）
- 桐朋女子中学校・高等学校（東京都）
- トゥンク・アブドゥル・ラーマン経営技術大学（マレーシア・サバ州）
- 特別な才能を持つ子どもたちのための学校と体育館
  （スロバキア・ブラチスラバ市）
- 南台科技大学　応用日本語学科（台湾台南市）
- ナンフア小学校（シンガポール）
- バイリンガル・コパリンスキー高等学校（ポーランド・ビエルスコ・ビアラ市）
- バカウ市立スピル・ハレ中等教育学校（ルーマニア）
- バルバラティ・パブリックスクール（インド・デリー市）
- 不二聖心女子学院中学校（静岡県）
- ビーコンハウス・スリ・イナイ・インターナショナルスクール（マレーシア・セランゴール州）
- 福島県立会津学鳳中学校・高等学校（福島県）
- 福島県立あさか開成高等学校（福島県）
- ブハラ地域カラブルバザール地区第 1 学校
  （ウズベキスタン・ブハラ州）
- ブユクチェクメチェ・ドガ・カレッジ（トルコ・イスタンブール市）
- 平安女学院中学・高等学校（京都府）
- PECHS 女子校（パキスタン・カラチ市）
- ベルノラーコヴァ第 16 小学校（スロバキア・・コシツェ市）
- ホウガン・セカンダリー・スクール（シンガポール）
- マインデンハイト高等学校（マレーシア・ペナン州）
- マザーランド中等教育学校（ネパール・ポカラレクナス市）
- マタイアス・ハマー高等学校アニナ校（ルーマニア・カラシュ＝セヴェリン県）
- 松本秀峰中等教育学校（長野県）
- 宮崎県立延岡工業高等学校（宮崎県）
- ミラノインターナショナルスクール（イタリア）
- 三輪田学園中学校・高等学校（東京都）
- 山ノ内町立山ノ内中学校（長野県）
- ヤロスラブリ産業経済大学（ロシア）
- ラブアン・インターナショナルスクール
  （マレーシア連邦領ラブアン島）

国際ユース作文コンテスト選考委員（＊敬称略・50 音順）

委員長	千　玄室	茶道裏千家前家元、ユネスコ親善大使
	西園寺昌美	公益財団法人 五井平和財団会長
	都倉　俊一	作曲家
	成田　純治	株式会社博報堂相談役
	服部　真二	セイコーグループ株式会社代表取締役会長兼グループCEO 兼グループCCO
	松浦晃一郎	一般社団法人 アフリカ協会会長、元ユネスコ事務局長
	美内すずえ	漫画家
	矢崎　和彦	株式会社フェリシモ代表取締役社長
	葉　祥明	絵本作家

主　催　公益財団法人 五井平和財団

後　援　文部科学省、日本ユネスコ国内委員会、日本私立中学高等学校連合会、
東京都教育委員会、NHK 日本経済新聞社

協　賛　セイコーグループ株式会社、プラス株式会社

2023 年度国際ユース作文コンテスト
【子どもの部】 文部科学大臣賞（最優秀賞）

きょうふのない世界

（原文は英語）

チママンダ・ケイトリン・ウゾエチ（8 歳）
ナイジェリア

平和な世界とは、ぼう力や不正、きけんのきょうふを感じることがない世界です。それは、じゅうの音も、わたしと同じ年ぐらいの子どもたちを含め、人が死ぬ話も聞こえてこない世界です。

わたしたちは一番上の階に住んでいますが、わたしはごうとうやゆうかいがこわいので、ねる時はいつも部屋のまどをしめてねています。いつも外で変な音が聞こえると、じゅうの音かばく竹か、それともわたしの家の変あつ器がこわれたのかと思います。母は、空気を入れかえるためにまどを開けておきなさいといつもわたしに言い、何も起きないからとわたしを安心させていました。そうです。今年の 5 月のあの夕方までは、何も起きませんでした。母と兄弟とわたしがいつもより少し早く家に着いてすぐに、大きな音が聞こえたのです。こわかったのですが、わたしたちはいつものそう音なのか、それともちがうものなのかどうか分かりませんでした。母がまどの外を見ましたが、何も見えませんでした。その後、女の人がさけんでいるのが聞こえたので、母は「ひょっとしたらその女の人はぼう力をふるわれているのかもしれない。無事かかくにんしないと」と言って走って外に出て行きました。母はしばらく外にいて、やっともどってくると、女の人がごうとうにじゅうをつきつけられていたとわたしたちに話しました。その女の人の車や電話、かぎがうばわれ、赤ちゃんも取り上げられそうになっていたそうです。その女の人はふるえていたので、赤ちゃんをだっこするのを母が助け、また母と近所の人たちは、何とかしてぬすまれたものを取りもどそうとしました。

その女の人と赤ちゃんは、少し前に家に着いたわたしたちだったかもしれません。それはまるでホラーえい画のようでした。しかし、安全な場所のないホラーえい画とちがって、その女の人にとっては母が安全な場所となりました。むしするのではなく、こまっている人を母が助けたおかげで、その女の人は、母のうでの中で安心することができました。母や近所の人たちが思いやりの心で助けたことで、その女の人は安心することができました。

マイケル・ジャクソンの歌「We Are The World」は、「We are the ones who'll make a brighter day so let's start giving（わたしたちこそが、もっと明るい日にできる者なんだ、だから、さああた

えよう)」と言っています。わたしはずっと、その歌の中の「giving（あたえる)」はただお金を人にあげることだと思っていました。しかし、実は愛をあたえることを意味しているのだと今は分かります。にくんでいてはあたえることはできないからです。愛こそがわたしたちに本当に必要なものだと、今は分かります。やさしさや希望、理かい、思いやり、がまん、公平さ、喜び、調和、平和は愛によってもたらされるからです。

人には、特にわかいわたしたちには、それぞれ果たすべき役わりがあります。それは、未来はわたしたちにかかっているからです。わたしたちは未来を正しい方向に進めて行かなくてはなりません。だから、わたしは今、世界を愛で満たそうとみなさんによびかけます。愛に満ちた世界にきょうふはありません。なぜなら、あなたのとなりの人があなたにとっての安全な場所になるからです。となりの人の安全をかくにんするだけで、わたしたちは他の人たちにとっても安全な場所になれます。友だちではないからといって、もう学校で他の人たちをむししません。学校で友だちがいじめられているのを見たら、もう放っておくようなことはしません。学校で自分の友だちだけにあいさつをするようなことはしません。クラスメートがペンを必要としているのを分かっているのに、自分のペンをひとりじめするようなことはもうしません。だれかが意地悪をしていると知ったら、わたしは親切にします。答えが間ちがっていてもクラスメートが質問に答えようとする時、わたしははげます。友だちが意地悪をしていたら、わたしはその人たちに注意します。だれかが必要としていたら、わたしは手伝ってあげます。わたしは、わたしの平和な未来を、今より明るい世界をつくりたいのです。そして、それはわたし自身が始めることなのです。

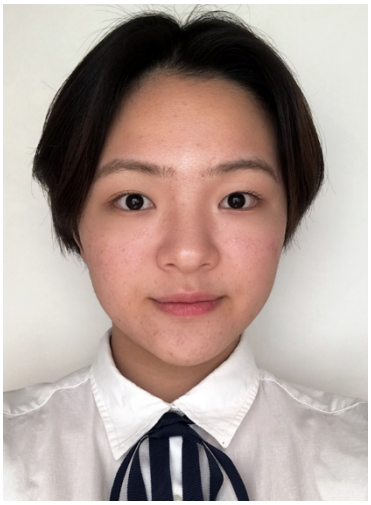
ぼう力や不正、きけんをふやしたがる悪い人はいつの時代もいるでしょう。しかし、多くの愛とそのすべての成果があれば、良い人はいつも悪い人たちに勝ちます。きっと、そのような悪い人たちは愛を受けたことがないから悪いことをするのだと思います。わたしたちの愛のこもった言葉や行いは、平和な未来をつくる上で多くのプラスの変化をもたらすことができることを覚えておいてください。きょうふのない未来を。

2023 年度国際ユース作文コンテスト
【若者の部】　文部科学大臣賞（最優秀賞）

夢見る力

（原文）

島﨑　みちほ（17 歳）
東京都
成城学園高等学校



平和な世界と聞いて、みなさんはどんな世界を想像するだろうか。対立・貧困がなく、人権を侵される人々がいない世界。そんな世界が訪れることを願い、それぞれの問題にアプローチして行動を起こしている人も多い。しかし、私はそもそも「平和な世界を夢見る」こと自体に意味があると考える。社会問題の解決を誰かから進められたり、強制されたりしている場合、そのモチベーションは長く続かない。しかし、能動的・自発的である「夢見る力」はより長く続く。そして、未来を夢見る力こそ若者が持つ最大の力であり、世界平和への原動力になるはずだ。

私は一昨年、日本代表の一員としてアメリカの高校生たちと様々な社会問題について話し合う機会を得た。そこでは参加者全員が自分の理想の未来について語っていた。それを聞いていると、それぞれが創る未来が楽しみになるのと同時に、「私の理想の未来とは何だろう」と考えるようになった。また、皆の理想とする社会を実現するサポートをしたいとも思うようになった。ところで私は、このように自らが校外活動に参加するだけではなく、3 年前から「校外プログラム大全」という団体で活動している。この団体の運営は全て高校生が行っており、高校生向けのサマープログラムやインターン、コンテストなどの情報をウェブサイトを通して発信している。加えて、社会問題の改善のために起業や団体の立ち上げ、研究を行っている高校生にインタビューをした記事も掲載している。例えば、「高校生が設立したミャンマー支援プロジェクト」「起立性調節障害を広める、高校生の活動とは？」など。

言い換えると、高校生の「夢見る力」を記事にして拡散しているのだ。その記事を読んだ別の高校生が触発され、自ら行動に出る場合もある。発信することで、夢をもたない若者にも影響を与えることができる。

私はこれらの体験から、自分の考える未来についてオープンに話すことの大切さを感じた。自分の夢を他者に話し、アドバイスをし合い、励まし合うことで「その夢を実現しよう」という気概がより強くなるのだ。このことは、話し相手が一人いる、もしくはインターネットに接続できる環境であれば誰

でも体験することができる。自分の考えを話すことは勇気のいることだが、一歩踏み出せば自分の周囲はもちろん、地球の裏側の人や全く興味が無かった人さえ動かすことができるかもしれない。この可能性を若者が認知することで「夢見る力」がより多くの若者に伝播していくのではないだろうか。同じ夢を持った若者同士が集まれば、それは若者の世論として社会に伝わり、社会が動くかもしれない。

これらを実現するには、より多くの若者の「夢見る力」を拾い上げること。また、夢を実現しようとする若者が挫折しないようにすることが必要である。こういった若者への働きかけは、政府や大きな組織が行うこともちろん大切だ。しかし、当事者である若者同士でサポートし合うことがより重要である。なぜなら、地域社会や SNS 上では必ずしも大きな組織の方が影響力を持つというわけではないからである。やはり、若者に限らず、人々は同世代の声や応援に共感しやすい。同じ目線で社会を見つめる仲間やロールモデルを多く創出することこそが、夢見る力を広げることへの近道なのだ。

私も、日本という小さな規模だが、これからも多くの若者の「夢見る力」を団体を通して社会に伝えたい。そして、私の夢は、演劇教育で世界中の子どもたちのコミュニケーション力や表現力、集中力、想像力を向上させ、誰もが自分らしく生きることのできる社会を作ることだ。これを実現するために、私自身が「夢見る力」の発信者となり行動を起こしていきたい。

2023 年度国際ユース作文コンテスト
【子どもの部】　優秀賞

相手の立場に立って考えること

（原文）

黒岩　歩未（13 歳）
東京都
東京都立大泉高等学校附属中学校

私は若者が率先して未来の日本を一緒に創っていくには、自分と意見が対立している人がいたとしても相手の立場を考えたうえで、相手に届く言葉を使って自分の意見を伝えることが大切だと思います。

先日の道徳で「野生の猛禽を守るために」という文章を読みました。この文章は個人的に私の心にとても残っていて、特に「相手に届く言葉で意見を伝える」というところに感動しました。

その文章は獣医をしている筆者が実際に体験したことをもとに書かれていて、鉛の弾丸によってハンターに狩られた鹿などの肉を鷹が鉛と一緒に体内に入れてしまい、鉛中毒で死んでしまう事例に立ち向かったときのものでした。普通、ハンターたちに意見を言うなら、猟をすることや、鉛の弾丸を使うことに対しての否定的な言葉が出てしまうと思いました。しかし、筆者はハンターの人たちに対して「鉛の弾丸は使わないでほしい」や「猟をしないでほしい」という言葉をかけたりはしませんでした。なぜなら猟は当時、禁止されていることではなかったことや、増えすぎてしまった鹿から住民の暮らしを守るためだという人もいたからです。もし、私がこの文章のハンターと同じ立場だったら、禁止されてもいないのにどうして猟をやめなければならないのか、と筆者に対して反感を抱くと思います。

そんな中、筆者は「鉛の弾丸から銅の弾丸に変えませんか」と訴え続けました。これは猟をやめることなく、鷹への被害も出さない提案でした。結果的にその思いが理解されて北海道で鉛の弾丸を使った猟は禁止されたというお話でした。

私はこのお話を読んだときに、相手が立っている立場を考えて、どのような言葉をかければよいのかを考えて行動した筆者に対して感動しました。

以前、私が小学 5 年生ぐらいだった時、新型コロナウィルスが流行し始めました。今となっては、マスクを取っている人も街中ではよく見かけるようになりましたが、当初は多くの人がコロナを警戒し、夏でも屋外でもマスクをつけて過ごすのが当たり前でした。私の通っていた小学校も例外ではなく、全員が常時マスクをしていました。そんなときに、私のクラスに休み時間中や休み時間の後のしばらくの間、マスクを取っている男子がいました。彼には持病があったわけでもなく、ただ自分の意志でマスクを取っていました。そのため、当時同じクラスだった多くの子が彼に対して「マスクをして」と言いました。私自身も彼に直接言ったことがありました。しかし、いくら私たちが彼に注意をしてもマ

スクを着けようとしないので、ついには先生沙汰にまで発展しました。先生からの指導があった日の帰りの会の時間に彼が全員の前に立って、「こんなご時世で不快な思いをする人がいることも考えないで勝手にマスクを取ってしまってごめんなさい。でも休み時間の後はどうしても暑くて取りたくなって取ってしまうので、少しの間だけ見逃してください。お願いします」といっていました。私は彼の行動に驚くと共に、納得することができました。それ以降、彼に「マスクをつけて」という人は一人もいませんでした。私は彼が素直に自分の気持ちを伝えたからこそ、全員に思いが届いたのだと思い返しました。

　現代ではインターネットの普及によって、ネット上に自分の意見を、正体を明かさずに載せることができるようになっています。その一方で相手の事情も知らずに情報を鵜呑みにすることで誹謗中傷が増え、自殺してしまう人もいます。きれいごとに聞こえるかもしれませんが、やはり自分の意見は相手の立場を理解したうえで、相手に届く言葉で伝えることが大切だと思います。

2023 年度国際ユース作文コンテスト
【子どもの部】　優秀賞

私たちはカラーパレット

（原文は英語）

アネリス・クリステル・ワルワチ・キスペ（14 歳）
ペルー

色は何色あるのでしょう。きっと何千、何百万色もあるに違いありません。ひょっとしたら、何十億色もあるかも知れません。それぞれの色は、唯一無二の色です。基調となる色の数は限られていても、色の明るさや強さを変えることで新しい色を作り出すことができます。同じように、私たち一人ひとりも、それぞれ独自の状況に沿って美しい文化的な筆運びで描かれた 1 つのキャンバスです。

多くの人々が自分の色の美しさを理解していないかも知れません。私もそうでした。その時のことを今でもよく覚えています。以前、お料理のワークショップに参加していた時、私はお湯で火傷をしてしまいました。その時、「アチャチャウ！」と言ってしまいました。ケチュア語で「熱い、熱い！」を意味する言葉です。私がその言葉を言った時、近くにいた女の子は「なんて下品なの…」とつぶやきました。私は戸惑い、恥ずかしくなりました。私は、そのフレーズを使っていた私のこれまでの人生すべてに困惑し、恥ずかしさを感じました。私の家族はケチュアの家系のため、その表現を使うことは当たり前でした。そのため、他の人たちが下品だと感じるとは思っていませんでした。

また別の機会では、母が学校に来た時に「私の可愛い女の子、今日はどう？」と言いました。母はいつも私のことを、愛情を込めてそう呼んでいました。その後、何人かの子どもたちが、私が甘やかされている、私はまだ赤ちゃんのように扱われているとうわさを広め始めたということを耳にしました。彼らが自分のことを話しているのを聞いた時、私はとても恥ずかしくなり、「すべてのうわさの原因」である母に対して怒りを覚えました。

次の日、母は、私の宿題を手伝ってくれていた時、「私の大切な女の子はどうしてそんなに賢いの？」と言って私を褒めました。「かわいい女の子」、母はまたその言葉を言ったのです。私は急に母に対して苛立ち、二度とそんな風に呼ばないで、と母に向かって叫んでしまいました。その後、私は目にあふれた涙をこらえることはできませんでした。母は、突然のことでショックを受けていました。私は自分がしてしまったことに気づいて、母に謝り、頬を流れる涙をこらえようとしました。

母はなぜ私が泣いているのか、とても心配し、優しい声で何があったのかと私に尋ねました。その時、私は、この数年間起きていたことをすべて話してしまいました。友だちと比べて私がどれだけの違いを感じていたのか、友達がどんな風に話していたのかを話しました。母は私の状況を理解し、私を慰めて、世界中の人は誰もが違っていて個性的であること、中には他の人よりも違いがはっきりしていて個性的な人もいること、しかしそれは、私たちが他人と比べて、より劣っているわけでも、より大切

というわけでもない、と説明してくれました。母は私に「私たちはみんな、私たちの中に違う色のパレットを持っているの。それで描くものは個性的で、かけがえのないものなのよ」と話してくれました。当時、私はその言葉の意味を理解できませんでしたが、それ以外のメッセージは理解することができました。

その後、とても困難でしたが、少しずつ他の人たちが私のことをどのように言っているのか、思っているのかについて気にすることを止め、自分を愛することに集中するようにしました。同時に、私と同じような境遇にいる人たちを手助けするようになりました。

そして今、私はやっとあの時に母が私に話したことの意味を理解できるようになり、母の言葉は私の人生の中核となっています。私たちの違いとは、お互いを引き離したり、憎んだり、拒んだりするためのものではなく、個性であり、お互いを尊重し愛するためのものです。

リンゴの標準的な色は赤ですが、青リンゴもありますし、いつも青い空は夕焼けでオレンジや黄色を帯びることもあるのに、なぜ人は、自分と違う人たちを傷つけるのでしょうか。

私はまだ子どもなので分からないことがたくさんありますが、差別的な状況を目にしたり、経験したりしたら、その状況に立ち向かい、他の人たちの意見に流されずに自分らしさを持ち続けなければならないと思っています。私たちは、平和につながる道です。平和な世界とは、色のない白の世界ではなく、すべてのカラーパレットが調和をもって共生し、歴史のすべてにおいて最も美しいキャンバスを作り出す世界に違いありません。

2023 年度国際ユース作文コンテスト
【子どもの部】 優秀賞

隣人を愛すことを受け継ぐ：
若者こそが世界をより良い場所に変えられる

（原文は英語）

マリーナ・ラウラ・ソアレス・アセベド（14 歳）
ブラジル・リオグランデ・ド・ノルテ州
サン・ゴンサロ・ド・アマンテ・セシ中学校

祖母がこの世を去った瞬間から、私は、急に自分の一部が引き裂かれたように感じていました。祖母の死は私の心に虚しさを残し、かつて私の人生を占めていた安らぎは一筋の風のように消えてしまいました。祖母を亡くしたことで、さまざまな感情や困難な出来事が目まぐるしく押し寄せ、想像もしていなかったことが私の世界観を変えてしまいました。

祖母の存在は、尽きることのない良識や、愛、慰めの源泉でした。祖母は、たくさんの価値観を私に教えてくれました。それらは今でも私の支えとなっています。祖母と笑い合い、抱きしめ合い、深く話すことができなくなったと考えるだけで、打ちのめされた気分になりました。私の人生の愛する存在を失うという非常に悲しい出来事でした。

気が付くと、私は、何の指針も影響もなしに自分のアイデンティティを再構築するという課題に直面していました。非常に不安定な世界の中で、まだ 7 歳だった私は、自分の立場の不安定さに直面していました。祖母のベラ・ルシアは、他者への愛とコミュニティへの献身となる生きたお手本でした。彼女の関心は家族の枠にとどまらず、周囲の人たちすべてを心から大切に思っていました。その違いに関係なく、さまざまな人々とともに、寛容さと思いやりをもって喜んで彼らを受け入れていました。彼女の人々を歓迎するという気持ちのあり方、そしてまとめる能力は人々を奮い立たせました。彼女の行動と思いやりは今でも忘れられません。私は、祖母をお手本として、若者にとって平和な世界を築くには、差別することなく、お互いを愛し、すべての人を大切に思うことを心に誓うことから始める必要があると学びました。グループを一つにまとめ多様性を好意的に受け入れることでこそ、私たちは今以上に調和の取れた社会を築くことができるのです。そして、そのような社会では、それぞれが評価され仲間がいることを感じることができます。

幼少期や思春期に触れたこのような素晴らしいお手本によって、私は平和な世界の再構築は、隣人を愛し、差別することなくすべての人々を大切にすることを心に誓うことから始まるのだと分かりました。さまざまな人々を団結させ、人種や考え方、信仰、障害の有無に関係なくすべての人々を快く受け入れることで、私たちは調和の取れた、これまで以上に思いやりのある社会を築くことができます。そのような社会では、それぞれが評価され尊重されていると感じられます。

祖母を失ったことは私の安らぎの終焉ではなく、祖母から引き継がれたすべてを実践する成長の機会だったのです。私は、祖母の存在が私の根底に溶け込んでいるという確信することで慰めを見いだしました。なぜなら、私は彼女の血を引いていて、祖母が受け継いできたものが、祖母が見返りを求めずに接したすべての人と私を通じて生き続けているからです。失ったように思えた安らぎは、ゆっくりと改めて形作られ始めました。

現在の私の最大のモチベーションと願いは、抱きしめることなどの簡単な行動や慰めのメッセージや、家族とともに困窮している人々に寄付することなど、あらゆる方法で他者を助けようとすることです。なぜなら、小さなことが大きくなっていくからです。私たちの社会は、他者への共感が欠けていて、お互いをもっと愛し、相手の考えや他者の意見を共感することができなくなっています。2023 年、私はあるプロジェクトのクラスリーダーになりました。これは私の学校で発展し、若者の自主性を促進し、若者が市民として社会に参加し責任感を持つことを目的としています。問題から距離を置き、ただの一人の若者でいるのであれば、私たちは自分たちの周りでどんなことが起きていてもそれほど心配しません。自分で責任を負い、先を思い描ける機会を得ることができたとき、若者がいかに確執と困難にあふれているかを認識できます。近年、平和は若者から奪われているため、私たちは結束が力を生むことを示す必要があります。私たちは人間であり一時の存在ですが、私たちが他者の人生に撒いたものは決して忘れられることはなく、私たちの炎は燃え続けます。そして私たちは、思いやりやプロジェクト、献身を通じて他者を鼓舞する存在になります。

この平和を構築する道のりにおいて、若者は主要な役割を担っています。若者は変化をもたらす主体であり、今以上に平和な世界の再構築について驚くべきアイデアや革新的なビジョンを生み出すことができます。私たちは新しい世代であることから、未来に再び過ちを犯さないように、過去の世代の過ちから行動を起こし、学ぶ必要があります。

2023 年度国際ユース作文コンテスト
【若者の部】　優秀賞

平和な世界がここに

（原文は英語）

フェイソラ・マリア・ボラリンワ（17 歳）
ナイジェリア
ジョス大学

混乱、戦闘、そして暴力による殺人。それは、私が住むコミュニティでの長年にわたる紛争の経験でした。銃撃、ナタでの切り付け合い、血の海。それらは日常の光景でした。裸足で何キロも走った私の足は弱々しくよろめき、舌は口の中でカラカラに干上がっていました。私は体全体が恐怖に包まれていました。生きて明日を迎えられるかどうか、全く分かりませんでした。絶え間なく続く抗争によって、多くの子どもたちが孤児となり、その多くが、生まれて初めて目を開くか開かないかの内に殺されてしまうような状況でした。

協議や調停が何度も行われましたが、実を結ぶことはありませんでした。そこである日、私は目を覚ますと、平和を築き暴力を終わらせるために貢献しようと固く決意しました。私は、対立する 2 つのコミュニティがお互いに平和と愛のメッセージを伝え合えるよう、土着の「手段」を使うことにしました。あらゆる土着の民話や伝承の中から、平和、愛、慈悲、許し、お互いへの思いやりについての歌を集めました。また、土着のことわざや詠唱をもとに歌も作りました。

若造だとあしらわれて聞く耳をもってもらえないのではと思いましたが、私は父に、長老方に聞いてほしい平和のメッセージがあると伝えました。父は、私が言わなければならないと感じていたことに耳を傾けてくれ、これを推し進めるべきだと言ってくれました。次の協議の日、私は歌や寓話、伝承の中の平和のメッセージを携えて目的地へと向かいました。私のパフォーマンスの後、メッセージは長老方の心に深く染み入りました。歌の 1 つは、彼らが自分たちや同胞たちに行ってきたことについて反省するよう促すものでした。彼らは野蛮な行為によらない人道的な解決方法について真剣に考えることができたのです。

対立する両者が顔を合わせる次の協議の日、私はそこに参加するよう要請されました。「戦争のためではなく平和のためにやってきたのだ」と話を切り出した時、私は緊張しました。そして、彼らに対し、「平和にチャンスを与えてほしい」と訴えました。幸い、彼らは渋々ながらも私に賛同してくれました。彼らは私の歌や民話を全て録音しました。私は自分なりのささやかな方法で、彼らの心を平和へと向けさせることができたのです。もう一度、全ての歌や民話を聞かせてほしいと言われ、私は応じました。彼らは、私が紛争地に平和をもたらす覚悟を決めていることを見て喜んでいましたが、皆、罪悪感を強く抱いている様子でした。私の目標は、持続可能な平和を構築することでした。私はとても幸せ

な気持ちで家に帰りました。私のコミュニティの長老方が私を訪ねてきた時、私はほとんど休んでいませんでしたが、彼らは、私の話を聞きたがりました。私は、彼らに一度聞かせた話の内容を更新したり、それらに新しい情報を追加したりしました。彼らは大喜びし、チラシや記録の作成のための費用を出してくれることになり、私は実行に移しました。翌日、私の歌や朗読が TV とラジオで放送されました。

私はこの結果に勇気づけられ、さらにプログラムに演劇などを取り入れました。これらを全部一人で行うことはできなかったため、私の信念に興味を持った若者たち全員に関わってもらいました。私は自分たちが影響を与えることができたことに気づいたので、自分のコミュニティと争っていたもう一方のコミュニティに出向いて、さらにそこの若者たちをグループに誘いました。私たちは、歌、舞踊などのパフォーマンスに全て平和のメッセージを込めました。私たちは、紛争中の二つのコミュニティだけでなく、他のコミュニティの村の広場でもパフォーマンスを行いました。私たちのパフォーマンスとプログラムは、大きな成果を挙げました。紛争中だったコミュニティが、平和を受け入れることに同意したのです。両者は、平和に共存を続けています。平和な世界とは、愛、思いやり、許し、そして協調しながら生きることです。私たち若者は、平和のメッセージを広めるために団結することによって、今日の世界に平和を構築することができます。これはどこでも実現可能です。私には平和に関する強いメッセージを込めた忘れられないパフォーマンスがたくさんあります。私が始めたように、若者たちは集えば、自分たちの創造性や革新性を使って、人々の心や家庭、国、そして全世界に影響を及ぼす紛争の主な原因の解決策を見つけることができるのです。私たちにチャンスを与えてもらえませんか。

2023 年度国際ユース作文コンテスト
【若者の部】　優秀賞

平和についての 700 語

（原文は英語）

ヤン・コロレフ（17 歳）
ベラルーシ＜ポーランド在住＞
ワルシャワ・メアリー・キューリー高校

人々は皆、平和を望んでいます。しかし、これまで戦争は絶えず続き、誰も平和な未来を信じなくなってしまいました。この状況は果たして変えられるでしょうか。ー変えられます。私たちの世代が変われば、世界は変わります。人々が皆、変わりさえすれば。弟やクラスメートたちが変わりさえすれば…。これが、私が最初に考えたことでした。

ロシアによるウクライナ侵攻が始まった時、私は祖父に、弟や私は戦争を止めるために何ができるだろうかと問いました。祖父は答えました。「弟の部屋に入る前に、毎回必ず考えなさい。自分は弟を喜ばせに来たのか、それとも傷つけるために来たのかを。**お互いのテリトリーを尊重し、友好的に振る舞いなさい**。何かをする時には、より良い方法でできるかどうかを。両親や祖父母に、人生の中での良かったことやポジティブなことを話してもらうように頼んでごらんなさい。彼らが行ってきた善い行いから学びなさい。この遊びを、弟とやってごらんなさい」と。

この遊びを通して私たちが学んだこと

弟はレスリングを始めたがっていました。レスリングをやるのは良いことだと私たちは考えました。でも、もっと良いものがあるのではないか。もちろん、もっと良いレスリングはあります。攻撃的ではなく、防御的な。他者を攻撃して打ち負かしたいのか、それとも自分を守り友人たちを守りたいのか。そこで私たちは、正しい選択をしました。弟は柔道を選んだのです。私たちは**攻撃的にならない**ことの大切さを学びました。

2022 年にベラルーシの反政府デモが始まった時、知人の一人が「平和的なデモでは何も変えられない」と話していました。私たちは例の遊びをすることにしました。グーグルで「平和的な革命」と検索し、ポーランドやドイツ民主共和国などヨーロッパの国々で成功した平和的変革の情報を見つけました。万歳！　非暴力デモこそ正しかったのです。私たちは**忍耐強く、平和的である**ことの大切さを学びました。

正教会の司祭の多くは、他の宗教の信者は天国へ行くことはないと説きます。それは私たちにとっての難題でした。私たちには正教徒でない友人がたくさんいます。祖父は私たちに、ロシアによるウク

ライナ侵攻での人々の行動を比べてみるよう勧めました。「司祭の言葉を鵜呑みにしてはならない」と彼は言いました。全ての宗教に、神、人々、平和を愛する信者がたくさんいることを知りました。私たちは**寛容である**ことの大切さを学びました。

祖父は若い頃、歌謡バンドを組んで旅をし、病気のチェルノブイリの子どもたちのための資金集めをしていました。初めてのコンサートは、同性愛者たちのために、ドイツの別荘地で行いました。コンサート終了後、祖父は彼らのうちの何人かと話をしました。その一人が、「自分は多くの友人に受け入れられているけれど、自分は大多数の男性とは違っているので、幸せではない」と話しました。私たちは、**見知らぬ人や自分と異なる人を理解し、彼らに対して慈悲の心を持つ**ことの大切さを学びました。

私は学校である男子にいじめられていました。私の祖父は、その男子の両親と友好的に話をし、いじめを止めてくれました。その後、弟が同じ経験をしました。弟は柔道が得意だったので、私は弟に、いじめっ子と戦って懲らしめるようアドバイスしました。しかし弟は、私が同じ状況にあった時、どのように祖父が解決したかを私に思い出させてくれました。私は弟から、**争いを平和的に解決する**ことの大切さを学びました。

私の母は子どもの頃にドイツに住んでいて、たくさんのドイツ人と出会いました。彼らは友好的で、チェルノブイリの子どもたちへの支援活動を行っていました。しかし、母はベラルーシの幼稚園で、ドイツ人に関する悪いプロパガンダを耳にしました。彼女は「違うわ、ドイツ人は良い人たちよ。人を殺したりしないし、助けてくれるのよ」と抗議しました。私たちは**許す**ことの大切さを学びました。

私たちは祖父に、彼が平和のためにしたことについて話してくれるように頼みました。祖父は将校でした。祖父の任務は、敵の兵士たちに降伏を呼びかけることでした。1982 年、軍はアフガニスタンでの戦争に祖父を送り込もうとしていました。祖父はそれを拒否し、軍を懲戒解雇されました。出世できたはずのところを断ったのです。私たちは、**不当な戦争に加担しない**とことの大切さを学びました。

私たちは今も、祖父から教わった遊びを続けています。この遊びを通して学んだことは、他人ではなく**自分自身**がより良く変わらなければ、平和は生まれないということです。弟や私が、より平和的、寛容で、他者を尊重し親切になれるよう競い合うことを、将来の子どもや孫たちに教えなければ、平和は生まれないということです。恐らく私たちが生きる世界はまだ平和にならないかも知れませんが、私たちの子どもや孫たちはきっと平和な世界に生きられるはずです。皆さんも、この遊びに是非参加してください。将来の平和のために、良い行いや平和的な行いを競い合い、実践してください。世界中でこの遊びを一緒にやって生きていきましょう！

（注）タイトルの 700 語は、本作文コンテストの外国語での制限語数

2023 年度国際ユース作文コンテスト
【若者の部】　優秀賞

平和な明日のために違いを受け入れること

（原文は英語）

ハシーブ・イクバル（22 歳）
パキスタン
ラホール教育大学

私の国には、シンド人、バローチ人、パンジャブ人、パシュトゥーン人など、独自の文化を持つ多様な人々が住んでいます。私は、この多様な国を構成する文化、方言、慣習が美しく混ざり合うのを個人的に経験することができ、誇りを感じてきました。

パキスタンで生まれ育った私は、9.11 米国同時多発テロ後のアフガン戦争の混沌とした余波を目の当たりにしました。戦争の影響は、私のコミュニティ全体、特にアフガニスタンと国境を接する部族地域にも及びました。これらの地域は武力行使や過激化が発生する温床となり、家族は崩壊し、コミュニティはばらばらに引き裂かれていました。

混乱と不安定さの中、私は、大きな惨事から生まれた忍耐と連帯の物語を思い出します。大きな苦難に直面しながらも、部族集落の人々は、老いも若きも共に平和への道を見出しました。彼らは、暴力のパターンを断ち切る唯一の方法は、違いを受け入れ、お互いの間に敬意を育むことであると気づいたのです。

このストーリーをきっかけに、乾いた土地に生える弱々しい苗木のように、若者主導の活動が芽生えてきました。これらの組織により、様々なバックグラウンドを持つ若者、即ち部族集落に住む人々や都市部に住む人々、様々な民族性を持った人々が集結して、討論や意見交換に参加し、和解への努力を加速させました。

同様の取り組みとして、あらゆるバックグラウンドの若者たちが彼らに起こった出来事や願望について自由に共有できる、平和について議論する場が設けられました。こうした議論の場は、様々な観点が融合する場となり、ここで人々が紛争中に直面した苦難や問題、自分たちが大切にしている願望が語り合われました。

こうした交流の中で、私はあるパシュトゥーン人の少女、パルワシャのことを思い出しました。彼女の家族は全員、暴力の被害を直接受けました。彼女は戦争によって負った傷があるのにも関わらず、平和的な未来を築くために毅然とした態度を貫きました。「私たちは、偏見と分断がもたらす壊滅的な結果を経験しました」と、彼女は涙ながらに語りました。「思いやり、理解、受容の上に成り立つ新しい道を切り開くのは、私たち若者なのです」

こうした感動的なストーリーや議論を通じて、変化が加速しました。若者が協力し、社会経済的な分

断を超えた地域社会のイニシアティブを生み出しました。彼らは、理解や平和を築くための、学習活動や職業訓練コース、文化交流の取り組みを始めました。

さらに、こうした若者主導の平和プロジェクトの効果は、その後、数カ月から数年かけて、部族地域全体へと広がりました。蒔かれた相互理解の種が芽を出す中で、それまで侵略や困窮に苦しんでした町が徐々に安らぎを取り戻していきました。若い知性にとって教育機関や学校は、お互いに肩を並べて学び、成長し、宗教や文化の境界を打ち破る安全な避難場所となりました。

この先、パキスタン人の若者である私たちにとってきわめて重要なのは、平和の炎を持って前に進むことです。私たちは、長期的な平和の創造とは、違いを受け入れるための忍耐とコミット、そして揺るぎない情熱が必要とされるプロセスであるということを自覚しなければなりません。

他者と積極的に関わり、言論活動を支援し、多様な文化の垣根を越えた理解を生み出すことで、私たち若者は大きな影響力を発揮し得るのです。私たちは、偏見に立ち向かい、誤解を取り除き、思いやりを築くことで、私たちの文化に平和の種を蒔くことができるのです。

私たちは、平和やお互いへの尊重を育む教育プログラムを通して、忍耐や文化間の相互理解を促進することにより、連帯の絆を生むのに必要なスキルを次世代に引き継ぐことができます。包括的な立法を促し、少数派の視点を強調し、公正な社会への支持を表明することで、一人ひとりが歓迎されていると感じられるような雰囲気を醸成することができるのです。

アフガン戦争後の平和への道のりは、異なる意見を受け入れることによる変革の潜在的な可能性を示してくれました。私たちは、過去の傷が癒えるような未来を築いていくことができます。人類の交響曲を歌い続け、調和のとれた、歓迎すべきパキスタンの未来を実現するために協力し続けましょう。

2023 年度国際ユース作文コンテスト
【子どもの部】　入選

ぼくはまだ 7 さい

（原文は英語）

シドール・ヤロスラフ（7 歳）
ウクライナ

ぼくはまだ 7 さいです。まだほんの子どもです。ぼくは学校に行っています。友だちもいます。お気に入りのおもちゃもあります。大すきなお母さんとお父さんもいます。音楽の中でもロックミュージックが大すきです。ゆめはゆう名な”Queen”のような、自分のロックバンドをつくることです。そしてギターもならっています。ぼくのお母さんとお父さんがぼくのぜんぶのパフォーマンスに、いっしょにいてくれるのがゆめです。あなたが 7 さいの時に、人生の中でむずかしいことがあるなんて思えますか？　でも、ぼくの国にはせんそうがやってきたのです。

ある日の朝、ぼくはサイレンの音で目がさめました。とてもこわかったです。道はとてもこんでいました。多くのお店で、たなは空っぽになりました。その後、シェルターの中で長くつめたい夜をすごす毎日がはじまりました。あなたが 7 さいの時に、人生の中でむずかしいことがあるなんて思えますか？でも、ぼくはこの 7 さいというときに、ロケットがとんできて、たてものに当たってばくはつするのを見ました。7 さいにして、せんそうとはどのようなものか知っています。そのため、平和がどれだけ大切なことかをぼくは知っています。平和へのねがいは今、あらゆるイベントにおいて中心をなすことになっています。ケーキのろうそくをけして、みんながねがうのはただ一つ、平和です。なぜなら、ロケットが家に当たってすべてをこわしてしまったら、どれだけたくさんのおもちゃをもらってもいみがないからです。子どもべやがこわれたり、おもちゃがあちらこちらにちらばったりしてしまうのです。

平和とはしあわせなみ来です。ぼくたちはまだ子どもですが、本当に平和をねがっています。平和なみ来、家ぞくみんなで外国にりょ行に行けるみ来、きょうふのないみ来。人々が自ぜんと友だちになるみ来。人々がおたがにたすけ合うみ来をねがっています。

ぼくはまだ子どもです。たった 7 さいです。ほうりつを作ることも、平和をきずくためにやく立つ大切いなけっていをすることもできません。でも、子どもとして、地きゅう上に平和をきずくことにさんかできます。ぼくは自ぜんをまもります。人間と生きものの間の平和を大切にします。こん虫をまもります。そして、このとり組みにさんかするようみなさんによびかけます。テントウムシが道をはっているのを見たら？　ひろい上げて草の上においてあげましょう。コガネムシがひっくりかえって、どうすることもできず足をうごかしているのを見たら？　おこしてあげましょう。小さなとり組みがせかいをよくしていきます。ぼくはかんきょうをよごしません。なぜなら、地きゅうはぼくたちみんなの

家だからです。ぼくは人間と地きゅうの間の平和を大切にします。

　ぼくはまだ子どもです。でも、ぼくは平和につつまれたいと思っています。ぼくはクラスメートとなかよくしています。教しつの中の平和は学校を平和にし、学校の平和はぼくの近じょを平和にし、そしてじゅん番に町、そして国ぜん体を平和にすると思います。ぼくは、あいが平和の土台だと思います。やはり、あいが欠けているだけで、ねたみやみがってさ、いかり、にくしみが生まれます。ぼくは自分たちの人生をあいするようせかい中によびかけます。それは、たったひとつの人生、1 回だけの人生だからです。自らをまもることができない人々の人生をまもるために、ぼくは、こん虫のいのちをまもり、ぼくのお母さんとお父さんはぼくのいのちをまもり、ぼくのお母さんとお父さんのいのちはおじいさんとおばあさんにまもられています。ぼくたちのいのちはかみさまにまもられています。かみさまがまもってくれるおかげで、きれいなチョウチョウのように平和はぼくの国ウクライナにとんでくると思います。

　ぼくたちは子どもです。平和はもうすぐぼくの国だけでなく、せかい中にやってくるとぼくたちは思います。なぜなら、ぼくはまだ 7 さいですが、大りくと海がいくつあるのかを知っていて、水とくすりがたりない人たちがどの大りくにすんでいるのかを知っています。だから、平和がせかい中の人びとにおとずれることをぼくはゆめ見ています。なぜなら、すべての人が、平和につつまれるかちがあるからです。平和とは、せんそうがないこと。平和とは、ふんそうがないこと。平和とは、食べものや水が十分にあるせかい。平和とは、きれいな海と川のようなせかい。平和とは、どうぶつをつかったサーカスやどうぶつえんにおりがないようなせかい。

みんなに平和がひつようです。

2023 年度国際ユース作文コンテスト
【子どもの部】　入選

平和な世の中にするために

（原文）

染谷　春花（13 歳）
茨城県
常総学院中学校

私たちが食べているチョコレートは甘いけれど、本当は苦い。私は、このことを社会の授業で知った。アフリカのガーナでは、まだ 10 歳ぐらいの子どもたちが朝から晩までカカオ農園で働いている。小学校にも行けずに、高さ 10 メートルもあるカカオの木に上ってカカオの実を収穫している。大人が木に上ると折れてしまうような細い枝に上っての作業は、落ちたら、命を落とすこともある危険な仕事だ。カカオを収穫する子どもたちは、チョコレートを食べたことがないと言っていた。私たちが「おいしい」と食べているチョコレートのために、命がけで働いている子どもたちが大勢いるということをどれだけの人が知っているのだろうか。このような現状を踏まえて、近年、フェアトレードが行われている。自分たちの利益だけを考えるのではなくて、相手の国の人たちの生活も考えるという考え方だ。つまり、自分の側と相手の側の視点を二つ持って物事を考えるということなのだと思う。また、飢餓をなくす取り組みとして「テーブル・フォー・ツー」が行われている。飲食店や社員食堂で食事をすると、自動的にお金が途上国に寄付される仕組みだ。ただ見ているだけでなく、解決に向けて行動を起こしているのだ。SDGs にある「貧困をなくそう」「質の高い教育をみんなに」「平和と公平をすべての人に」などの目標は、まだ達成されていない。しかし、皆が自分の身近な世界だけを見るのではなく、広い視野を持つことで、世界は変われるのだと思う。そのためには、まず知ることが大切なのだと思う。

先日、学校で「爺さんの空」という劇を見た。特攻隊員の物語だ。特攻隊員になってしまった自分の子どもに「無事に帰って来てね。」と母親が震える声で言った。無事に帰れないと分かっているのに……。特攻隊員として亡くなった少年たちはどんなに辛かっただろう。特攻隊員で逃げ帰ってしまった人を、上官の人が殴る場面もあった。平和な国だと思っていた日本にもこんな残酷な時代があったのかと恐怖で震えた。最後に劇団員の方が、戦争の残酷さを伝えるために学校を訪ねて公演をしているのだと話してくださった。私は、実際に予科練平和記念館にも行ってみた。実際に残っている手紙や写真も展示してあって、生々しい戦争の事実を感じた。今まで知らなかった悲しい戦争の歴史に胸が苦しくなった。大人の都合で、国の都合で、せっかく生まれてきた命なのに、自分の命を輝かせることもなく、亡くなっていく。戦争は、絶対にしてはいけないのだと思った。私たちは、戦争を「始めない」世界にすることが大切なのだと思う。

平和な世の中とは、皆が幸せを感じ、命を大切にし、笑いあうことのできる世の中なのだと考える。平和な世の中を作るために必要なことは、「知ること」だと思う。学校に行けない子どもたちのこと、食べ物が欲しくても食べ物がない子どもたちのこと、教育を受けることが許されない子どもたちのこと、世界で起こっている紛争のこと、自分の国で起こった戦争がどんなものだったかということ、地球環境のこと、ウクライナとロシアの戦争について。目をそむけたくなるような現実がある。私たちは、まだまだ知らなくてはいけない大切なことがたくさんある。一つ一つよく知って、目をそらさずに真剣に見つめて考えることが私にできる第一歩なのだと思う。そして、次にできることは、相手の立場に立って物事をとらえ、解決に向けて行動を起こすことだと思う。世界が、ガーナの子どもたちのためにフェアトレードを始めたように。チョコレートが本当の意味で甘くなるように、私たちの世界が本当の意味で溶け合うように私自身、学び考え続けていきたい。

2023 年度国際ユース作文コンテスト
【子どもの部】　入選

正義とはなにか

（原文）

寒河井　創将（14 歳）
東京都
東京都大田区大森第六中学校

　社会科の授業で、2 つの問いが投げかけられた。
「正義とはなにか。」
「正義のために戦争は存在するか。」
僕は、次のように回答した。
　正義とは、自分が正しいと思っていること。「自分が」だから、人それぞれ正義は違うと思う。クラスには 36 人の生徒がいて、36 通りの正義がある。世界には 78 億を超える人々が住んでいて、78 億を超える正義がある。
　だから、ときに自分の正義と相手の正義が噛み合わないことがある。そういう時、人は喧嘩をする。もしそれが国だったら、その国同士は「戦争」をする。だから、A 国と B 国が戦争をしていたら、A 国は「自分が正しい」と思って戦争をしているし、B 国だって「自分が正しい」と思って戦争をしている。したがって、正義のための戦争は存在すると思う。逆に言えば、どちらも「自分が正しい」と思ってやめないところが「戦争」の恐ろしさだ、と僕は考えている。
　しかし、この回答を友だちに見せたとき、友だちは驚いていた。「正義のための戦争なんかあるわけ無いじゃん」と、言われた。友だちの回答を聞いたが、僕は理解できなかった。口には出さなかったけど、僕のほうが論理もしっかりしていて正しいじゃん、と思っていた。そこで、僕は恐ろしいことに気づいた。
　これも、正義じゃないか？
　自分は確かに自分の回答に間違いはないと思っている。でも、それは相手も同じなんだろう。相手だって自分の回答に自信を持っているし、だからこそ僕の回答に驚いたんだ。そう思うと、僕は冷や汗をかいた。「独りよがりの正義を振りかざしているから、戦争は恐ろしいんだ」と、ついさっきまでそう考えていたのに、気づかぬうちに自分自身が独りよがりの正義を相手に押し付けていたのである。
　今、ロシアのウクライナ侵攻をはじめとし、世界各地で様々な争いが起こっている。僕たち若者はその光景をテレビで見ても、「募金」とか、一時的な支援しかできなく、根本的な解決には一部の大臣とかしか関わっていなくて、若者には何もできることがない。だから、若者にできることは、一瞬少ないように見える。でも、それは間違いだ。なぜなら、僕たち若者は、「未来を変えられる」という、最大

のアドバンテージにして、最大の責任を背負っているからだ。平和な未来を創ることも、戦争だらけの未来を創ることも、僕たち次第なのだ。

もちろん、平和を望んでない人はいないだろうが、じゃあ平和のために何かしよう！と思うと、漠然としすぎて何をすればいいのかわからない人が多いだろう。では、僕たちが平和のためにすぐ実行できる身近なこととはなんだろうか。ここで僕が大切だと考えているのが、「自分と相手の正義のズレを認める」ことだ。相手の正義を肯定的に見てみたりだとか、自分が苦手な人でもその人の正義をよく聞いてみるとか、あるいは何か相手と対立があったときに、真っ先に手を出すのではなく、自分の正義と相手の正義を共有して、なんとか理解する努力をしてみるとか・・・。「正義」という言葉から考えを広げることによって、僕たちに出来ることがどんどん見つかってくる。「正義」は時に厄介になるが、しっかり正義について考え、理解を深めれば、頼れる味方にもなるのだ。正義と平和は、繋がっているのである。

結局、平和への近道とか、そんなものはなかなかない。世界規模で見たらほとんど見えないくらいの小さなことだけど、その小さな小さな「気遣い」の積み重ねが、平和な未来への長くとも確実な道だと思う。

正義は、皆それぞれ違う。そのことを自分の根本として、いや、未来を担う若者の根本として、平和な未来を築き上げていきたい。

2023 年度国際ユース作文コンテスト
【子どもの部】　入選

平和を信じる：シンプルな行動

（原文は英語）

タニシカ・アグラーベ（14 歳）
米国フロリダ州
ウィリアムズ中等教育学校

私は、これまでの人生の中で、平和は消滅してしまったという悲観的な人たちに数多く出会ってきました。実際ある程度、それが正しかったとしても、私たちが住む世界を落胆させるような言葉をたくさん聞かされてきました。「誰も信じるな。信じたら、騙される」「この世界には、助けてくれる人なんていない」。8 年前、ナイーブな子どもだった私は、文字通り、この生活の向こう側に横たわる矛盾に気が付いていなかったのだと思います。しかし、私は今、信頼の側について、世界の希望と平和のために努力しています。時には、全く前例の無い不運な状況の中で、おかしな人たちが人々の人生に付け入り、影響を及ぼすこともありますが、私は平和が持つ無限の空白、つまり優しさにあふれた社会こそが本来の姿であると認識しています。

この言葉が頭をよぎる時、私は、2015 年にニューデリーで列車に乗っていた時に起こった、人生を一変させるような出来事を思い出します。このよく知られた駅の喧騒の中で、線路に停車していた列車の軋む音が突然フラッシュバックしました。人々は最初に列車に乗ろうと走っていたり、愛する人たちが親類を抱きしめようと駆け寄っていたり、構内アナウンスでは列車の到着を知らせていたりしていました。母は私の手をしっかりと握りしめ、手を離さないようにと私に言いました。離さない、離さない、と私は繰り返し自分に言いました。私はアメリカ出身、つまり外国出身です。ナイキの靴と穴あきジーンズ、そしてきれいなブラウスを着ていました。周りの人たちは危険です。なんの躊躇もなく私から盗むでしょう。私は、自分の後ろにいる何百人という人たちから押されるのにうんざりしていました。靴紐がほどけたとき、しゃがんで結び直しました。見上げると、母が近くにいないことに気づきました。心臓がドキドキして、背負っていたリュックサックが重くのしかかり、群衆の中の人々の顔がぼやけていきました。涙があふれ、迷子になり、押されて、膝をついてしまいました。無関心に横を通り過ぎる人たちの渦に飲み込まれ、私はちっぽけな存在でした。

青い”サリー”を来た女性が下を見てしゃがんで、私に手を貸そうとしてくれました。私は「彼女を信用してはだめ」という言葉が無意識に頭をよぎりました。彼女は危険な人かも知れないと思いました。

その女性は「ベタ（お嬢ちゃん）、大丈夫？」と声をかけてくれました。

話すことを内心拒んでいるにもかかわらず、私は声が震え始め、すべてを打ち明けるにはどうしたら良いのか言葉にできませんでした。

「私、私、道に迷ってしまったの。お母さんがどこかにいるの。でも見つからないの！」

その女性は、私がどこにいくつもりなのか尋ね、母の元に連れて行ってくれると言ってくれました。私は母のことを精一杯伝えました。彼女の目が輝いた時、私は彼女が何かに気づいたのが分かりました。私たちは人々の迷路の中を進み、私はやっと母を見つけました。母も群衆の中で私を探していました。私は母に駆け寄ると、安心感で満たされました。その女性は微笑み、母は彼女に感謝を伝えました。

その日の、この怖かった出来事は、優しさや平和に対する私の誠実な思いを取り戻す声となりました。今、私は 14 歳の女の子ですが、この出来事は、現在一部の混乱の地で起きている何千という紛争に比べれば、取るに足らないことだと思います。しかし、虚構の世界に怯えていたか弱い子どもだった私は、新しいビジョンを描けたことに計りしれない誇りを感じています。今、私は悲惨なことが起きる世界で生きていますが、それらは回避することができるのです。ティーンエージャーの私は、日々ソーシャルメディアを使い、他の人たちが共有する問題や世界で起きている危機を目にします。当たり前のことですが、メッセージは一瞬に拡散されるのだと気づきました。もし一瞬で拡散されるなら、親切な行為を通じて見知らぬ人たちを助けるためにメッセージを送り、認識を拡散し、支援を得ることができます。

COVID-19 のパンデミック中に、私は世界中の農村の地域でわずか数日の間に膨大な数の人々が大きな打撃を受けていることを知りました。そのため、このような資源不足の地域に酸素濃縮器を提供するための資金調達を支援する取組みに参加しました。誇らしいことに、5 万ドル以上が集まり、これにより無数の命を救うことができました。ソーシャルメディアがこのような活動を促進するためのプラットフォームとして機能したのです。

平和の概念は多面的で、本当に多くの世界観に分かれます。しかし、平和への道のりは優しさから始まります。それは、私が自らの経験から得た方法です。平和な世界とは、困窮している人々が住む社会に手助けにやってくる人々がいる世界だと思います。見知らぬ人を信頼できれば、この世界は私たちにとって素晴らしいものになると、私は信じています。

2023 年度国際ユース作文コンテスト
【子どもの部】　入選

意識改革で平和な世界へ

（原文）

弓削　勇人（14 歳）
東京都
東京学芸大学附属世田谷中学校

この作文を書くときに「平和」から連想したものがいくつかありました。平和といえば鳩、鳩といえば動物、動物といえば生物、生物といえば地球、地球といえば海と考え、生命の誕生した地球の原点ともいえる「海」に関連づけて書こうと思いました。

僕は中学生になってから何回かビーチクリーンのボランティア活動に参加して、海にあるゴミの多さに驚きました。海には、お菓子の包装紙やペットボトルなどのゴミが沢山あります。粉々になり、砂にまみれたマイクロプラスチックの多さにも愕然としました。それを地道に拾うのは楽しくなく、苦痛でつまらないと最初は思っていました。しかし、実際に参加してみると色々な事に気が付きました。まず、リーダーの言葉が印象的でした。「ゴミ拾いが地味で楽しくないと思っている人もいるかもしれないけれど、それを楽しくすることが大事」。実際にやってみると、ゴミを拾って少し海がきれいになったという達成感があり、楽しみながらゴミ拾いが出来ました。そこで僕は、「つまらない、地味だ」などは偏見であって、実際にやって知ることで印象が変わると分かりました。また、リーダーはこうも言っていました。「一人じゃ何もできないけれど、誰かが始めないと何も変わらない」。その言葉に背中を押されて、自分も何かを実際にやってみようと思いました。

何かできることはないかと考えていた時、海のお掃除ロボットコンテストがあることを知り、応募してみました。海を掃除するロボットを考える一方で、そもそも「ゴミを減らすにはどうしたらいいのか？」を考えました。そこで、重要な事に気付きました。海をきれいにするには二つの事が重要です。まず一つ目は人の意識改革です。「今、海はどうなっているのか？」「なぜこのような問題が起きているのか？」に興味を持ち、現実を知ることで、ポイ捨てが減るのではないかと思いました。「知ることで変わる」これもまたリーダーの言葉でした。二つ目は、ポイ捨てされたゴミを回収する方法と、資金が必要だということです。捨てられたものが放置されたままでは地球が汚れていく一方だからです。

一つ目の意識改革を促進する案は、「クリーン予報」をニュースで放送することです。海の環境がどうなっているか、川や海にあるゴミがどこに多くあり、どこの地域がポイ捨て問題について改善されたか、されてないかなどを数値化し、天気予報のように毎日放送します。それを知ることで、人々のポイ捨てに対する意識を変えていきたいです。毎日お天気を気にするように、海のクリーンについても気にかけるようになって欲しいです。二つ目のゴミを回収し、資金を募る案ですが、企業に「クリーン

予報」のスポンサーになってもらいます。クリーン活動に参加していると宣伝することで、企業のイメージも上がると思います。また、数値を見て、ポイ捨て環境が悪い地域から資金を募ります。そうすることで、ゴミの多い地域も環境改善に尽力するようになると思われます。

意識改革には発想の転換も必要です。楽しみながら問題解決に取り組めば、子どもや若者も興味をもってくれると思います。ゴミ拾いを考えるワークショップに参加した際、ユニークな取り組みを知りました。タピオカブームで飲み終わったカップの放置ゴミが増加した際、かわいい専用のゴミ箱を設置したり、競技場でラグビーボール型のゴミ袋を配り、ゴミを入れたボールでトライする企画をしたら、ゴミが激減しました。このように、働きかけ次第で意識が変わり、行動も変わります。

世界のあらゆる問題も、意識を変えれば見える景色が変わってくるかもしれません。小さなことでも行動に移し、それが波及することで、平和でより良い世界を作っていけたらいいなと思います。

2023 年度国際ユース作文コンテスト
【若者の部】　入選

壁を打ち破ることの大切さ：レッテルに捉われてはいけないのはなぜか

（原文は英語）

早川　瑞希（15 歳）
東京都
洗足学園高等学校

私はインスタグラムを開き、イスラエルとパレスチナの紛争についての投稿を見つけます。「パレスチナ側」あるいは「イスラエル側」のコメントをスクロールしていきます。イスラエルとパレスチナの紛争の本質に、本当の意味で言及しているコメントは一つもなく、解決策も見つかりません。テレビをつけると、ロー対ウェイド判決が覆ったことに対する賛成派・反対派の双方が映ります。左派メディアが妊娠中絶賛成派のみにインタビューを行う一方で、右派メディアは妊娠中絶反対派のみにインタビューしています。こうしたことから、私は、誰もが自分たち自身に貼ったレッテルのみに注目していることに気づきました。こうした状況はあまりにも自然なため、疑問を抱く人はいません。それにしても、私たち皆が特定のカテゴリーに属していなければならず、あるトピックについて賛成または反対をしなければならないのは、なぜでしょうか。相手側が何を主張しようしているかを少しでも理解しようとしないのは、なぜでしょうか。これがまさに、私たちが平和を達成できない理由です。誰もお互いに理解しようとしないからです。

私たちの社会は、人々をカテゴリー分けすることに躍起になっています。なぜなら、カテゴリー分けすることで、自分たちがあたかもある特定の集団に属しているように感じられるからです。しかし、私たちが見過ごしているのは、こうしたカテゴリー分けには意味がなく、自分たちにレッテルを貼ることで、様々な意見を持った人たちが理解し合うのを阻む壁を作ってしまっているということです。自分自身をあるカテゴリーに属する者と分類する時、私たちは相手側の主張を考慮しようとすることさえ自然に拒絶してしまいます。現在、米国では、ほとんどの人々が自分たちを民主党員か共和党員かにカテゴリー分けすることで、分断がかつてないほど大きな問題となっています。国際問題を解決するためには団結や協力が必要です。こうした分断は私たちの間の相互理解を阻んでおり、ひいてはこれらの社会問題の解決を自ら阻んでしまっているのです。

私はシンガポールに住む機会に恵まれてきました。人種的に世界で最も多様な国の一つであるシンガポールで、私は本当の意味での多様性を経験しました。「周りを見渡してみてください。これほど多様な肌の色や宗教を持った人たちがこの教室に集まっている。とても美しいことではありませんか」。毎年「カルチャーデー（文化の日）」があり、その日になると私たちは全員、それぞれ独自の文化について発表を行いました。皆が、自分自身の文化について誇りを感じられる日でした。私は以前にも増し

て日本人としての誇りを感じながら家路についたものです。お互いに異なっていることは、私たちにとって取るに足らないことでした。なぜなら、私たちは、社会が設定した、ある民族が優れていて他の民族はそうではないというような価値観を持っていなかったからです。政治に注目するようになり、ソーシャルメディアに触れるようになって初めて、人々がいかに分断されているかを認識しました。私が、行動を起こすべきなのは、未来を形づくることになる自分たち若者なのだ、と気づいたのはその時でした。

最後に私たちの間にある壁を打ち破るためには、社会による分類に捉われてはなりません。また、ある問題について、あらゆる視点から学ぼうとする努力が必要です。友人と私は、本当の意味であらゆる視点から物事を見るプラットフォームがほとんど無いことに気づきました。そこで、私たちは本当の意味で他者の意見を理解しようと努めていない事実を自覚するよう促すため、ウェブサイトやソーシャルメディアのアカウントを立ち上げようと計画してきました。そこで気づいたことは、若者たちは確かに社会問題について関心があるということ、そして私たちは相互理解が欠けているということです。そのため、お互いの立場について学ぶ機会が、社会問題を解決する上での鍵となります。相手の意見を知らなければ、その意見についての反論すらできないではありませんか。

現在の世界における社会問題の解決は不可能であるように思われるかもしれません。なぜなら誰も自分の意見を変えようとしないからです。しかし、他者を説得しようと試みる前に、まず他者が信じているものをその人たちがどうして信じているのかを理解する必要があります。ある議論をしている双方が、実は最終的には同じ目標を目指していて、達成するための「方法」のみが異なる、ということすら多々あります。そのため私は、自分たちの間にある壁を打ち破り協力し合うことが、平和の道筋へと私たちを必ず導いてくれると強く信じています。

2023 年度国際ユース作文コンテスト
【若者の部】　入選

愛を通して制度を組み替える：平和に向けて若者が進む道のり

（原文は英語）

ゲーナ・クッバ（16 歳）
米国ニューハンプシャー州
フィリップス・エクスター・アカデミー

平和な世界とは、衝突がない世界ではなく、不必要な苦しみのない世界です。他者の尊厳や幸せを犠牲にする衝突は、人間性を脅かします。そうした脅威にも関わらず、私たちには、なぜ根本的に搾取と抑圧のシステムに加担しているのかを理解しようという危機感がありません。若者たちは、より公正で平和な世界への取り組みを始めることができます。と言うのも、自分たちを取り巻く世界についてどのように考え認識しているかについて、じっくり調べるからです。私たちのより複雑な制度やシステムは、世界の捉え方に基づいています。社会の組織は、核となる信条によって左右されます。学校教育から経済に至るまで、文化や習慣の中にはっきりと見て取ることができます。私たちのシステムの土台となる信条は当然、私たちが支持する信条となります。こうした信条はあらゆる社会構造の中に織り込まれ、一端を断ち切ればその全てが崩壊してしまいます。私たちは、全てのコミュニティを一つの原則に従わせようとします。宇宙が混沌へと向かうのは法則ですが、私たちは躍起になって厳格な秩序に固執します。「現代」社会は、秩序立ったシステムと構造という基盤の上に成り立っています。しかし、これこそが私たちに害を与えているのです。こうした秩序を維持するには、これらのシステムの土台となる信条を私たちが支えなければなりません。この厳格な秩序を打ち砕くことができるのは若者たちです。自分たちの制度の主体となることで、私たちはシステムを変える重要な役割を果たすことができるのです。

不必要な苦しみを取り除くために、若い世代は私たちのシステムの基盤となっている信条に疑問を投げかけ、異なるアプローチをし始めることができます。社会が若者に対し、世界の捉え方、ひいては世界の扱い方について誤りがあるかどうかを立ち止まって問うように促すことはありません。若者は、さらに思いやりや、自分自身を知り世界中の格差を埋めるための力を持っています。私たちはかつてないほどに、ネットワーク状に繋がり合っていますが、その繋ぐ糸はどんどん細くなっています。私たちは、地球や自分たち自身にストレスを与えてしまっています。絶え間ない生産や活動に心を奪われてしまいました。若者の役目は、お互いの関係や自然界を修復し癒すため、愛の力を取り戻すことです。皆でお互いに思いやりを持ちながら生き、何が私たちを阻んでいるかを知らなければ、平和協定の締結や戦争の終結を期待することはできません。何が私たち人間を人間たらしめているのかに焦点を当てるのは、まずは若者たちからです。私たちが無私無欲になり真剣に愛することができなければ、自

由、持続可能性、正義、民主主義という目標は達成できません。若い世代は、私たちを取り巻く世界への感謝を促す能力を持っています。こうした制度の組み替えに早く取り掛かれれば取り掛かるほど、私たちの社会にさらに融合をもたらすことができます。愛の力を生かすことで、私たちはもっと平和な世界へ近づくことができるのです。

私たちは、自分たちを隔離し閉じ込めるためのこぎれいなプラスチック容器を作りました。生命を扱い尊重するために、私たちが社会から課せられる義務は、たとえあったとしても限定的です。私たちは、発泡スチロールトレーに載せられラップに包まれ、完璧な状態で供給された家畜の肉を購入します。私たちは自分たちが摂取するために殺された生命のことを考えることも尊ぶこともしません。息苦しい都会の空気から逃れるために飛行機を使いますが、大気に放出されるその排気には無関心です。私たちは今までになく進歩していますが、どう愛せばいいのかを知りません。愛せないのなら、互いにとって、自分自身にとって、自分以外の世界にとって、私たちはどのような存在なのでしょうか。お金が満たせるのは空虚な心だけです。愛は互恵関係、全体の成長、そして尊重することの価値を教えてくれます。愛することとは、あるものの本質的な価値を十分に理解することです。もし愛を世界へと広げれば、きっと私たちは宇宙の無秩序を受け入れ始めるでしょう。抑圧的な制度は、思いやりによって根絶されるかも知れません。愛によって、私たちは正しくないものに対抗できるようになります。それは世界を変革しようとする意志です。まずは私たち若者から徹底的に愛することを始めたら、どのようなことが実現できるか、自分たちのシステムを構成する信念が、愛という土台の上でどのように生み出されるかを想像してみてください。私たち若い主体が、現状に対し誠意を持って挑めば、平和な世界は実現可能なのです。

2023 年度国際ユース作文コンテスト
【若者の部】　入選

誕生日ケーキのろうそく

（原文は英語）

ミラ（18 歳）
ベラルーシ

私は死ぬ準備ができていませんでした。平和のためには、命を犠牲にする人々が必要だという人がいます。「私は違う。15 歳の私一人では何も変えられない。踏み付けられ、忘れ去られるだけだろう」と、故郷のミンスクの路上で抗議活動を行う人々とすれ違う車の中で、震えながら思いました。2020 年、不正選挙と何千もの命が失われたのを目の当たりにして、バラ色の眼鏡をかけた子どもっぽい私の理想主義は心の内側に閉ざされました。その時、私は、平和ではないという血の流れるような現実を初めて経験しました。私は、現象としての暴力についてはよく分かりませんでしたが、もう他の人の暴力を否定するのを止めました。政権に口をふさがれ、胸が張り裂けそうになりながら、また相変わらず自分が無価値であると感じながらも、断固として不正に屈しないという意志で、私は闘いを始めました。

私にできることは何だったのでしょうか。それは、私の視点や志を共有できる仲間を見つけることでした。世界のゲームにおけるステークホルダーとしての「世界の若者たち」という曖昧な立場は、その本当の答えに出合うと、消えてなくなります。ジョージアの首都トビリシで行われた、3 つの国とのオンラインによる「ヨーロッパ奨学金プログラム」でのボランティア活動は、私にとって「国際的な若者」の一員になるための道筋となりました。そのプログラムでは、大切なことは何か、生活を向上させるという共通の目標にどのように貢献できるかを学びました。自分と似たような考えを持つ人々に囲まれ、意識やチームワーク、誠実さ、献身、他者を助けたいという思いやりや希望が持つ力の価値について学びました。

私たちは皆、行動を通してコミュニティを改善しようと努めているものの、現在の秩序は荒廃してしまっています。様々な地域出身の友人たちを抱きしめ、彼女たちの心をしっかりと受け入れ、温めていると、私の体が彼らや彼女たちの痛みに共鳴しているのを感じます。私も含めて一部の人々は、家に帰れず、受け入れもされず、無力で不安な状態に置かれています。立場の弱い小さな社会集団に属していようが、多数派集団に属していようが、私たちに人権は一度も与えられたことがありません。国内外での軍事衝突による荒廃に直面しています。こういったことの全てが、私たちの中に癒えることのないモヤモヤした傷を作りました。しかし同時に、私たちはお互いに歩み寄り前進するよう促されています。平和な世界に生きるための権利と機会を奪われながらも、私たちはそれを創造しようと試み続けているのです。

私は学校で、「平和」を、その定義の一つ、「戦争がないこと」という複雑な表現で言語化することを学びました。「absence of war（戦争がないこと）」という、たった 3 語に世界中の人々が同意し、さらなる議論を続けるために、平和の概念とはどれほど洗練されている必要があるでしょうか。それでも私は、その複雑さ故に、私たちの社会の中で人類が扱えないものは何もないと信じています。とは言え、特権や権力を持つ人々が、自分たちが人類の運命を変えられると決めた途端に全ては行き詰まってしまいます。私は様々な性質を持つ国際紛争や地域紛争を数多く研究してきましたが、世界がより平和になることを妨げている最も厄介な原因は権力のダイナミクスであると考えています。

理想主義的かもしれませんが、人々の個々の選択が他者の自由を制限しない状態を創造することが、私たちにできる最善の策である、と心の底から信じています。誰もが、人権と機会に満たされた人生を送る資格を持っています。これを完全に達成するのは不可能であると分かっていますが、私はまだ 18 歳で、このまま人間らしく生き続けたいと思っていますし、他の人にもそうあってほしいと願っています。だから、私たちはその解決策を見つけられると信じています。人間による行動の一つ一つ、あるいは行動しないことの一つ一つは、個人の考え方や価値観から始まります。仲間同士の学び合い、若者同士の意見やアイデア、経験の交換を通して、誰もが公正に成長・向上していく世界規模のコミュニティに近づくことができます。NGO や市民社会の他の組織の活動に若者たちを巻き込むことに焦点を当て、彼ら彼女たちがお互いに協力し合い、地域レベル・国際レベルで若者のアイデアや意見を表明できるよう、政府（欧州若者フォーラムなど）と共に、会議の場やプラットフォーム（模擬国連など）を作ること、行動を起こすために私たちにさらなる力を与えること―これらは、世界を平和へと導くために必要な土台となります。

誕生日ケーキのろうそくの火を吹き消す時、私はいつも「世界の平和」を願ってきました。静かに、願いごとを心の中で何度も唱えるのです。そうしないと、願いは叶いません。以前は平和を「願って」いました。正しいことはそれしかないと考えていました。しかし、私はもう願うことはしません。私は「信じて」います。何故なら、私は、何千、何百万もの人々が平和に向けて協力し合っていることを知っているからです。絶対的な平和を完全に実現するのは不可能です。しかし、私は絶対的な平和にもっと近づいた実感を得たいと願っています。そして私たちなら、それができると思います。

2023 年度国際ユース作文コンテスト
【若者の部】　入選

領主の宗教は領民の宗教？――血塗られた橋から明るい未来へ：より良い明日に向けての若者の結束

（原文は英語）

アイシャ・ムヒッチ（20 歳）
ボスニア・ヘルツェゴビナ
サラエボ国際大学

殺すか殺されるか。正しい選択も間違った選択もない。あるのは単なる選択肢だ――いつもそう言われてきました。私たちの国はいつもナイフで傷つけられる側で、「近隣諸国のナイフ」と戦ったことはありません。1683 年から 1995 年の歴史の中で延々と続いた、10 回の恐ろしい大虐殺の中で、バルカン半島のムスリムたちは壊滅しました。迫害者たちは、「キリスト教会の外には、真実、正義、善良、神との真の関係はない」というキリスト教会の教えに基づいて行動します。しかし、一体このような言葉が非キリスト教徒に対する大虐殺を正当化できるでしょうか。

神は、自分のものでないものを奪う権利を誰にも与えてはいません。命は大切にされるべきものです。それが他の人間を苦しめるなら、なぜ良いこととして賞賛されるのでしょうか。宗教などという神聖なものの名の下に、なぜこんなにも凶悪なことができるのでしょうか。宗教は人々を虐げるためのものでしょうか。

私は全ての大虐殺についての情報を探している内に、直近の大虐殺の前には、しばらく虐殺が起こっていなかったということに気づきました。そして、ある考えがふと浮かびました。まるで大虐殺に有効期限があるかのように、100 年が経過し、私たちがその大虐殺のことを忘れ、許し続けてしまう限り、同じことが繰り返されてしまうのです。

人生は川に似ています。そこには始まりがあり、障害物だらけの大荒れの時期があり、全てが死に、記憶だけが残る終わりがあります。大河には必ず橋が架かっています。私たちと共に多くの不幸な出来事を経験したのが、16 世紀に建設されたメフメド・パシャ・ソコロヴィッチ橋でした。とても美しい橋ですが、自国の民の血で汚れてしまいました。硬い石の上で多くの人々が苦痛や苦悩を味わい、なぜ崩れなかったのかと疑問がわくほどです。

平和とは人間の骨のように脆いものです。一度壊れてしまうとうまく直らず、「雨が降る」たびにシクシク痛みます。

生まれた時からの悪人はいません。しかし人生は、善人にハッピーエンドが保証されているおとぎ話ではありません。善と悪は至るところに存在しています。どちら側が優勢になるかは、それを選ぶ人々や環境次第です。

他の民族に対する憎悪が悲惨な状況の主な要因です。そのような環境では美味しいリンゴもうまく育ちません。宗教や民族性に基づく不平等を信じる人々に囲まれているという理由だけで、子どもたちがどんな影響を受けるか、想像するだけでも恐ろしいです。

古い世代を変えることはできませんが、若者たちが古い世代からの差別の影響を受けないようにすることが大切です。

自らの心の声に耳を傾け、大人の世界が求める理不尽な要求に従うことをやめさえすれば、進歩が現れ始めるでしょう。ゆっくりとした前進かも知れませんが、進歩には間違いありません。社会的活動を通して、既に達成されたこともあります。子どもたちが親世代の影響を受けることなく、肌の色や民族で人々を判断しないようになれば、全てが自然に解決できると私は信じています。

歴史は暗く恐ろしいものですが、私たちはその歴史の中に生きることはできません。前を向き、常に闘い続けなければなりません。

未来は、過去ではなく、新しい世代の土台の上に築かれつつあります。一人一人の子どもたちが結束し、平和な未来づくりに取り組めば、まだ世界を救うことができます。最も純粋で創造的なのは、自己中心的な要求や個人的な利益ではなく、皆にとっての生活の条件を高めることを目指している子どもたちです。善と悪との闘争が絶えず続いていますが、善は必ず勝利するはずです。苦労して学びを得なければならないこともあります。自分自身が肌で感じたことがなければ、他者の痛みを感じることはできません。何に対しても、忘れられた思い出という地へ入ることを許してはなりません。しかし同時に、自らの人生全体を過去の土台の上に置く必要はありません。あなたにできる最も価値のあるものは、忘れることでも、許すことでもなく、痛みと共に成長することです。

かつて、世界は地位、人種、民族によって完全に分断されていました。そして王位に就く者たちがあらゆる決定を行っていました。私たちはそこから大きく進歩し、若者たちが大きな影響を与えられる段階にまで到達しました。

私たちは立ち上がって結束し、圧制者に対して「ノー」を突き付けなければなりません。なぜなら、圧制者たちが血塗られた過去の象徴である一方で、私たち若者は明るい未来の代表だからです。

2023 年度国際ユース作文コンテスト
【若者の部】入選

思いやりの中に平和を見つける

（原文は英語）

フォラサデ・ボラリンワ（21 歳）
ナイジェリア

母国ナイジェリアの私が育った場所では、他のコミュニティと抗争を繰り広げていました。常に恐ろしい銃声が鳴り響いていました。もっと恐ろしかったのは、殺人、そして多くの命や財産が失われることでした。抗争が起きるといつも、私たちは同盟関係にある近隣のコミュニティへ避難しました。毎回の抗争が収まる度に、勝った側は多くの人々を殺したと喜んでいました。

ある疑問が私の心に湧き上がったので、周りの人々に尋ねました。「なぜ人が別の人を殺したことを喜ばなければならないのか。どうして私たちは殺し合いを続けているのか」。しかし、私が求めていた答えをくれた人は、誰もいませんでした。

私のコミュニティは常に攻撃を受ける側でした。私たちは苦しい試練の被害者でした。数週間から数カ月続く避難生活の後、私たちは荒廃した我が家に戻り、学校へ行く準備をしました。もう一つの厳しい戦いは、私たちが学校で直面した屈辱や挫折でした。それは私たちにとって終わりのない戦いでした。私たちに抗争を仕掛けたコミュニティの若者たちと同じ学校に行くことで、いじめられ、嘲りや冷笑を受けることになりました。先生たちは知っていましたが、何もしてくれませんでした。

学校で受けたひどい扱いは、学習に対する集中力や熱意、そして生活全般のウェルビーングに大きな影響を及ぼしました。成績の悪い生徒が多く、中退してしまう者もいました。私自身も、影響を受けなかったとは言えません。

私は学校を中退する代わりに、いじめっ子たちと友だちになりました。思い切って、平和の価値や、一緒に平和的に過ごせたらどんなに素晴らしいかを彼らに語りました。思いやりが私のテーマでした。

私は、思いやりの価値とはどのようなものかについて、学校の皆の注意を引くために実践を始めました。私たちが通っていた学校は設備が整っておらず、椅子も足りませんでした。天井から雨漏りし、雨季にはいつも教室が水浸しでした。このせいで、教室の濡れていないところで椅子の取り合いが発生しました。こうした状況から、さらに頻繁に口喧嘩が起こり、教室内は混とん状態になりました。私は教室内で椅子を取り合うのではなく、雨の日には 1 時間早く登校し、教室の水を掃き出すことにしました。それから、濡れているところにモップをかけたところ、教室内が快適になり、落ち着き、平和になったのです。

当初、抗争相手のコミュニティ出身の生徒たちは、私が頑張って掃除をしたところに気軽に座ることができない様子でした。しかし、私はどこにでも好きなところに自由に座るよう彼らを手招きしま

した。私がモップがけをしたところは、私の同じコミュニティ出身の友だちだけのものではない、と彼らに伝えました。私は同じクラスの全員に同じように伝えました。私は全員に対して思いやりの心を抱いていました。お互いに争い合うのを見るのが、とても悲しかったからです。

私は、部族に関わらず皆にとって快適な教室になるよう、雨季の間中ずっと掃除を続けました。すると、ある時から、他の生徒たちも協力してくれるようになりました。私は、敵対しているコミュニティ出身の生徒と私のコミュニティ出身の生徒に、お互いへの思いやりの心、愛、配慮を持つように説きました。私たちは協力し合い続け、持っていたものを全て共有しました。平和が戻り、私たちの間に広がりました。

幸い、雨季が終わると教室内は乾きました。しかし、私たちの間に育まれた平和が「干上がる」ことはありませんでした。私たちは互いの家を行き来するようになり、親たちもそれを止めませんでした。これは、クラス中、学校中の他の生徒たちにも影響を与えました。今、私たちの不完全な過去は消え去り、共に平和に過ごしています。危機的状況も減り、以前のように猛威を振るうことはありません。

親切になり、あなたが配慮していることを他の人に示しましょう。これらは全て、思いやりに包まれています。世界中の若者が、結束し、あちこちでお互いに小さな思いやりを示すこともできるかも知れません。私たちはいつかそこに到達するはずです。若者たちは過去の過ちを正し、人々が人種や年齢、性別、宗教に関わらず平和に共存する未来を創造することができるのです。

皆が、特に若者たちが配慮や思いやりを持てたならば、きっと自分たちが心から望む平和な世界を実現できるはずです。